



小川鼎三理事長の死を悼む

故日本学士院会員・東京大学名誉教授・順天堂大学客員教授・日本医史学会理事長小川鼎三医学博士は、大正十五年東京帝国大学医学部医学科を卒業し、直ちに東北帝国大学医学部解剖学教室の助手に任ぜられ、昭和三年助教授に昇任。同十一年東京帝国大学医学部講師を兼任し、東京大学医学部附属脳研究施設の創設に携わった。翌十二年アメリカ合衆国に神経解剖学研究のために渡米、一年間在留研究の後、ヨーロッパの脳研究所関連施設を視察して帰国した。昭和十四年東京帝国大学助教授に任ぜられ、医学部解剖学第三講座を担当、同十九年に教授に昇任、同二十年より医学部第一講座を担当した。同三十三年に医学部附属脳研究室室長を兼任、同三十七年の退官まで兼任した。この間、東京大学理学部の講師を併任し、脳研究のパイオニアとして、斯学の基礎を築くとともに、今日の脳研究の先鋭として活躍する多くの門下生を育成した。

東京大学退官後、順天堂大学医学部教授に任ぜられたが、ここで医史学研究室を開設、ここでも斯学の発展に尽力し、ここを日本の医史学研究のセンターに築き上げた。

博士は、これよりさき、昭和四十一年に日本学士院会員となり、昭和四十七年には東京都神経科学総合研究所所長に任ぜられた。

小川博士の学問的業績は大きく三つの分野に分けられる。その一つは鯨類の研究である。これは主として東北大学時代になされた歯鯨の分類に始まる。それは東京大学に移って鯨類の中枢および末梢神経の研究、発生学的研究へと拡がりを見せ、日本における鯨類学の基盤が博士によって築き上げられたことは周知の事実である。

第二の分野は中枢神経系の研究である。それは東北大学時代に始まるが、博士は哺乳動物脳の比較解剖学を研究してい

る間に、特に臘肭獸や海豚類の小細胞性赤核が著しく発達している状態に着目、これが出发点となって、サルやネコの脳の破壊実験を併せて行い、人脳の赤核の本態を解明し、錐体外路系、とくに赤核および中脳と小脳の関連諸核の関係を闡明にした。この仕事に対して昭和二十六年に日本学士院賞が授与された。なお、博士が動物実験で採用した定位脳手術法は、当時日本ではまだ殆ど使用されていない研究方法であったが、今日これは脳研究の基本的方法となっており、この分野でも博士はバイオニアとして大きな役割を果たした。

第三の分野は医史学の研究である。博士は昭和十三年にシーボルトと本邦の鯨について論文を発表して以来、この分野で多くの論著を残したが、特筆すべきは日本学士院より発行した、明治前日本医学史に収載された日本解剖学史である。ここに従来のこの分野の論著ではみられなかった丹念な史料分析による新しい研究法が採用され、その後の研究者に多大な影響を与えた。また、昭和三十九年に出版した博士の著書『医学の歴史』は毎日出版文化賞を受賞したが、同書はいまも名著として広く読まれている。

小川博士はまた、優れた教育者でもあった。博士の門下生は東京大学、東京医科歯科大学、金沢大学、順天堂大学、新潟大学、名古屋大学および全国各地の医科大学の教授となり、各自研究に教育に後進の指導にあたっている。

小川博士は研究、教育にあたりと共に学会の組織運営にも尽力された。特に博士の温厚で、深い学識を備えた人柄は多くの人々から敬慕され、この余人をもって替えがたい人望のために日本解剖学会理事長を昭和二十一年から十余年にわたってつとめ、日本医史学会理事長には昭和三十五年から亡くなるまで二十四年もの長期間つとめた。また日本学術会議の脳研究連絡委員会の委員長も昭和三十七年より十余年もの長い間在任し、各々の長老として後進の指導に当り、尊敬を一身に集めていた。

博士は、医学関係の文化財の散佚を恐れ、昭和四十七年には財団法人日本医学文化保存会の設立に尽力し、さらに昭和五十二年には同財団の医学文化館館長となった。また、昭和四十七年には財団法人日本古医学資料センター（現在の財団

法人野間科学医学資料館)の常任理事となり、医学史および科学史の文献収集、保存に尽力した。また、昭和五十八年には財団法人医科器械資料保存協会の理事に任ぜられ、日本の医学史および科学史の研究基盤の拡充に多大の功績を残した。

博士の編集主幹になる『日本医事文化史料集成』は未曾有の関連資料を集めた力作であることにより、昭和五十四年度の毎日出版文化賞特別賞を受賞した。

博士はまた、昭和五十一年より毎年国際医学史シンポジウムを主宰し、英・米・独・仏のみならずアジアの近隣諸国からも新進気鋭の若手の学者を招聘し、活発な討議を重ねてきた。いまや既に八回の会合を重ねた同シンポジウムはその成果を出版し、世界でも異色なシンポジウムとして関係者の関心を惹き、高く評価されている。

昭和四十一年十一月博士は日本学士院会員に選定され、以来十七年余、病床に就かれた最近の数カ月を除き毎月の学士院例会に出席され、授賞事項の提議および審査、会員の選考等に関与された。一方、第二部(自然科学部門)第七分科(医学)選出の運営委員として本院の重要な審議に参画されるとともに同分科のまとめ役をつとめてこられた。昭和四十八年三月には本院を代表してイギリスの自然科学アカデミーである、ロンドン王立協会(Royal Society of London)の招請で渡英、かの地の学者との交流を深めてきた。

また、自己の研究報告、研究者の研究成果を提出、紹介されることにも熱心で、しばしば例会で発表、医学史関係の研究論文は日本文紀要に、解剖学・神経学に関する論文は英文紀要にそれぞれ投稿、掲載されてきた。

所属の第二部ばかりでなく、第一部(人文・社会部門)の史学関係会員とも親交をもち、乞われて第一部の授賞審査に与ることも数回に及んだ。

このようにして、博士は深遠な学殖と豊富な体験を活かして幅広い活動を学士院においても示された。

終生謙虚で真摯な人柄は、学究的態度とともに博士を識る多くの同僚・子弟から景仰され、敬慕されてきたところである。